

# 博士学位論文審査要旨

2013年7月23日

論文題目： 新生のイスラエルを視た者  
— 祭司エゼキエルと「再活性化運動」 —

学位申請者： 北村 徹

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

副 査： 神学研究科 教授 Ada COHEN

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

エゼキエルは、紀元前 598 年第 1 回捕囚でエルサレムからバビロンへと連れて行かれ、そこで預言者として活動した人物である。彼の言葉と行為は、48 章からなるエゼキエル書にまとめられ、ヘブライ語聖書における三大預言書のひとつとされている。

エゼキエル書には象徴行為と呼ばれる多くの奇妙な行動が記されている。そのため、他の預言書とは異なる扱いを受けてきた。研究者はエゼキエル書における理解困難な内容から、しばしばエゼキエルを肉体的・精神的な障害を被った人物と見てきた。こうした主張が果たして妥当なエゼキエル（書）理解なのかという問いが本論文の出発点である。

本論文は、他の預言書には見られないエゼキエル書の特徴に注目することにより、新たなエゼキエル（書）理解を提示するものである。具体的には、エゼキエル（書）研究への適用の有効性が指摘されながらも、本格的に行われてはこなかった再活性化運動の考えを適用することで、エゼキエル（書）についての新たな理解を切り開く試みである。

第 1 章は、エゼキエル書の統一性と同質性を扱う。エゼキエル書の編集史に関する先行研究を概観し、そうした研究に用いられてきた判断基準が必ずしも有効ではないことを指摘し、エゼキエル書の同一性、同質性を踏まえた研究の重要性を主張している。

第 2 章は、エゼキエルという人物像に関するこれまでの精神病理学・心理学的研究を概観する。捕囚という状況による心的外傷後ストレス障害を反映した人物像として、さらには実在の人物としてではなく、あくまでも文学的な人物像としての理解を試みる近年の研究成果を検討することで、テキストと人物像の特徴に則したエゼキエル（書）研究の必要性和可能性を確認している。

第 3 章は、エゼキエル（書）研究に新たな知見をもたらすとされる再活性化運動を紹介する。再活性化運動とは、外国からの侵略などにより、文化的枠組みが崩壊に瀕するような状況において預言者が啓示を受け、その状況に応答し得る新たな文化的な枠組みを提示することで、社会構造全体の更新がなされるような文化の変化現象のことである。

第 4 章は、再活性化運動の考えをエゼキエル書に適用する。再活性化運動がエゼキエル書の内容に合致することを確認しつつ、特に 40-48 章が「聖を護る」ことを軸とする祭司的コスモゴニーとして理解され、それが律法、神殿、国土などイスラエルのコスモロジーを形成する基本的構成要素を備えていることから、祭司的な新たな文化的ゲシュタルトとして捉えることができるとされる。

第 5 章は、前章で明確にされたエゼキエルの祭司性をさらに再活性化運動の観点から考察する。エゼキエルの祭司性とは預言者への部分的あるいは付加的要素などではなく、物語の動的構造を

形成する基盤であることが明らかにされる。捕囚による祭司的枠組みの崩壊とその崩壊に対する対抗手段を持ち得なかったことが、祭司エゼキエルを預言者とならしめた背景なのである。

本論文は、エゼキエル書とは捕囚に直面した祭司エゼキエルが預言者的機能を通して、その祭司的本質を実現した過程が記されたものと理解し得ること、また、エゼキエル書が祭司エゼキエルの自己治癒的な意味合いを持つ、一貫した方向性を有するものであることを明らかにした。エゼキエル書の特徴に注目し、再活性化運動という考えを適用することで、エゼキエル（書）研究における大きな問題である預言者と祭司との関係性について明解な説明を提供していることは高く評価できる。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2013年7月23日

論文題目： 新生のイスラエルを視た者  
— 祭司エゼキエルと「再活性化運動」 —

学位申請者： 北村 徹

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

副 査： 神学研究科 教授 Ada COHEN

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

北村徹氏は、2006年3月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、2006年4月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2013年7月23日13時より、神学研究科委員会は北村氏に対して総合試験を実施し、約2時間にわたって氏から十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有することを確認した。研究に必要な語学力については、聖書ヘブライ語原典と英語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：新生のイスラエルを視た者－祭司エゼキエルと「再活性化運動」－

氏名：北村 徹

## 要旨：

本研究は、エゼキエル書の特徴に注目することによって、その再評価の必要性と可能性を提起するものである。具体的には、捕囚というコンテクストを生きたとされるエゼキエルへの接近において、その適用の有効性が指摘されるに留まっていた A. Wallace の再活性化運動というモデルを初めて本格的に適用し、その適用結果の考察を通して、新たなエゼキエル書理解を提示した。

1 章ではエゼキエル書の研究史を概観し、同書の統一性、同質性を確認した。2 章では、長年にわたる心理学的な研究史をふりかえりながら、そのユニークな人物像に注目する必要性を確認し、同様の立場に立つ先行研究を批判的に紹介した。そしてテキストと人物像の特徴に則したエゼキエル研究の必要性と可能性を提起した。3 章ではこの問題提起を導入として、再活性化運動のモデルを提示し、エゼキエル研究の新たな視座として詳述した。そして 4 章ではその方法論をエゼキエル書に適用し、考察を行った。以下がその内容である。

まず、再活性化運動の概略がエゼキエル書の内容に合致することを確認した。また、モーセの律法以外で律法の集積が唯一記され、幻の神殿や国土の再分配などが記述されるエゼキエル書に特異な 40-48 章の内容について、そこに記される律法や神殿、国土の再分配などが「聖を護る」という一貫したベクトルを備えていること、浄化システムの中核である祭壇を中心に数層の正方形が同心円上に構造化されている在り方などから、「聖を護る」ことを軸とする祭司的コスモゴニーであるという理解を提示した。そして、それが律法、神殿、国土などのイスラエルのコスモロジーを形成する基本的構成要素を備えていることから、祭司的な新たな文化的ゲシュタルトとして理解することが適当であるとする見解を提示した。

次に、「自己同一化の選択」、「ネイティビズム」、「成功と失敗」などの再活性化運動としての特徴を決定する項目から、エゼキエル書の内容を検討した。「自己同一化」については、エゼキエル書の内容が侵略者の文化システムの取り入れは顕著には確認されず、古代のシステムの「復活」と「ユートピア的なもの」を中心とするものであることが確認された。「ネイティビズム」については、侵略者であるバビロニアに対しての対抗的要素はほとんど確認されず、逆に、被害を受け、ヤハウエがその守護神であるはずのイスラエル（ユダ）やエルサレムへの攻撃が顕著であることが特徴であることから、エゼキエル書においては侵略者への対抗や支配からの解放以上に、ヤハウエの力の卓越やその尊厳の確保に焦点があったと解釈された。「成功と失敗」については提示された文化システムの実現の有無ということでは失敗に終わったと理解されるが、バビロニアへの対抗的な要素がほとんど認められなかったことから、エゼキエルにとっての問題の焦点とは、あくまでも「新しく、より良い統合を達成する」こと、Wallace の言葉で言えば「新しい文化的ゲシュタルト」が創出され

ることにあつたのであり、侵略者の排斥などではなかったとする解釈が提示された。運動の発展段階の観点からは、エゼキエル書は「伝達」の段階で終わったと考えられる。しかし、より中心的と考えられるモーセの律法と矛盾する内容を含むにもかかわらず、正典として継承されて行ったこと、そしてユダヤ教、キリスト教の伝統に影響を与えていったことがエゼキエル書の特徴として考察された。

再活性化運動を観点とする以上の検討から、再活性化運動の枠組みからエゼキエル書を捉えることの有効性が確認され、また、特に40-48章を新たな文化的ゲシュタルトとして捉えた場合、それが極めて祭司的な内容であり、また、「聖なるものを護る」という強固なベクトルを備えていることが確認された。以上が4章で行われた考察である。

エゼキエル理解における分岐点ともなり得るエゼキエルの祭司性について、5章で検討を行なった。先行研究におけるエゼキエルの祭司性の理解を批判的に検討しながら、本研究ではエゼキエルの祭司性を同書のより大きな文脈あるいは構造から検討した。プロローグとして4章の「 $\text{עָוָן אֲשֶׁר} \text{ (罪を負う)}$ 」に、過程については「 $\text{טָהַר} \text{ (浄化)}$ としての破壊」に、そしてエピローグとして祭司的コスモゴニーを記す40-48章における「 $\text{לְבַרְכּוֹ} \text{ (分ける)}$ 」という、それぞれ極めて祭司的な機能を示す表現もしくは語彙に注目した。イスラエルやエルサレムへの徹底的な攻撃や破壊が記される同書の前半部分において、捕囚の原因、経過、結果に密接に関わるものとして、またバビロニアの侵攻やエジプトの弱体化という文脈においても、 $\text{עָוָן}$ が基本軸を形成していることが確認された。同書のこのような $\text{עָוָן}$ に対してエゼキエルの「罪を負う ( $\text{עָוָן אֲשֶׁר}$ )」行為が、イスラエルの $\text{עָוָן}$ を明示する(起動させる)とともに、預言や象徴行動という手段を通してではあるが、最終的にはその除去と浄化に関わっていたことが示された。捕囚というエゼキエル書のコンテクストにおいて最重要と言えるバビロニアのイスラエルへの侵攻はイスラエルにその $\text{עָוָן}$ を想起させると同時に、その穢れを浄めるもの、すなわち、「浄化 ( $\text{טָהַר}$ )としての破壊」として記述されていた。エゼキエル自身もまた、預言を通してこの浄化としての破壊に参加したのである。破壊の後にもたらされたのは、「聖を護る」という強固なベクトルを備えた祭司的コスモゴニーと言うべき40-48章であった。この箇所では「分ける ( $\text{לְבַרְכּוֹ}$ )」ことが基本的な機能を担っていたのであり、神殿を核としながら「イスラエル」を新しく分け直し、新たな範疇、新たな総合的調和のありようが示されるその記述は、創世記冒頭の天地創造の記事に比されるようなものであった。

以上から、エゼキエルの祭司性とは、部分的あるいは付加的要素などではなく、物語の動的構造を形成する基盤と評価された。このようなエゼキエルの祭司性の意味について、再活性化運動における「預言者」「ストレス」「治癒」などの観点から検討を行なった。

初めに、「罪の浄め」と「範疇の提示」などの祭司的本質が、預言や象徴行為、「視る」などの預言者固有の機能によって遂行されていることを確認した。祭司的本質と預言者の機能の協働とでも言うべきエゼキエルのこのような特異な在り方は、「固守するならば解決できないストレスの軽減のためにそれ以前の役割を捨て、新しい文化的な役割を引き受けるという機会に直面した」ことがその誕生の契機になる、再活性化運動の「預言者」の在り方から説明され得ることを指摘した。すなわち、祭司エゼキエルは、その祭司という役割を固守していたのであれば解決できないストレスを軽減するために預言者となったのである。そのストレスとは捕囚という事態による、「ヤハウエの存在を中核とする聖の在り方」という文化的ゲシュタルトの破綻によってもたらされたものであった。その破綻はイスラエルの「境界設定者」であり、イスラエルの宇宙と社会が調和した平衡状態の維持を、儀式によって職務として担う祭司にとって、決定的な事態であった。すなわち、その維持は神

殿での儀式を通してなされるものであったが、捕囚という事態はその祭司的な枠組みを根底から破壊したのである。再活性化運動の観点からすれば、祭司的枠組みの崩壊とその崩壊に対する対抗手段を持ち得なかったことが、祭司エゼキエルをして預言者とならしめた背景だと説明される。エゼキエルは預言者としての機能を通して、捕囚という事態を招いたと理解されるイスラエルの罪を負い、その浄化としての破壊に参加した。そして、根底から崩壊した祭司的枠組みに対して、「聖を護る」という強固なベクトルを備えた祭司的コスモロジーがコスモゴニックなレベルで立ち上がったことを視たのであった。40-48章の内容は言うまでもなく祭司的な境界設定を記すものであるが、それは新たな範疇や総合的調和の「創出」であり、「維持」という祭司の職務を超えるものだった。その意味でエゼキエルが新生のイスラエルを視たことは、エゼキエルがその祭司的本質を預言者的機能を通して遂行したことの頂点である。

以上の考察から、再活性化運動の観点に立てば、エゼキエル書とは、捕囚に直面した祭司エゼキエルが預言者的機能を通して、その祭司的本質を実現したものと理解し得ることが示された。本研究は理解困難とされ、しばしば「病的」と言われてきたエゼキエルに対して、同書に記されているプロセスが祭司エゼキエルの自己治癒的な意味を持つ、一貫したプロセスを持ったものであることを提示した。エゼキエル書においては祭司的要素が動的構造を形成していること、そして祭司とは異なる預言者的機能はその祭司性を補償する役割を果たしていることを示したのは本研究が初である。そしてエゼキエル書の特徴であるその祭司性について、再活性化運動の観点から、それがエゼキエル書に記されるプロセスの起点であり、そのプロセスを形成するものであり、祭司的コスモゴニーというべき40-48章へと至る背景であることを示した。この点も本研究が初めて提示した、従来の研究には無かった理解であろう。エゼキエル書に対してその特徴に注目し、再活性化運動というモデルの適用によって、一貫したエゼキエル書の解釈が可能になることを示したという意味で、本研究は新たな視座を提示するものであり、今後のエゼキエル研究に資するものと言えよう。